

百人町教会

集会案内

礼拝：毎週日曜 午前10時30分
 於 東京家政専門学校2階
 聖書研究会：第1・3水曜 午後7時半
 於 Zoom
 連絡先：〒162-0066 東京都新宿区
 市谷台町14-1-701 賈晶淳 方
 TEL/FAX 03-6273-2930
<http://www.hyakunincho-church.com>
 郵便振替口座：00180-8-565379



ろば



私の目線(八八)

コロナ肺炎に罹患して

小川 和男

昨日、二度目の緊急事態宣言が発出された。後手後手としか思えぬ菅政権の対応策に不安を覚える。かじ取りの難しいことは重々承知だが、コロナ対策の方針を詳細に明確に説明し、支持を訴えればよいのにと苛立つ。今後の課題総てに正しい選択と速やかな決断を期待できるのかと、不信感を持ってしまふ。

昨年十一月、膝手術後のリハビリ入院中にコロナに感染した。発熱が七度台で鼻水もあつたが元気にリハビリに励んでいた。ある晩八度五分の発熱があり、念のためPCR検査を受けると結果は陽性、肺にも霧状の影が何か所もありコロナ肺炎と診断された。食事に何の味もせず、コロナの匂いもしないなど思っていたが、振り返ってみるとコロナの症状だったのかもしれない。発症後数日もたたずに肺炎になるとはと驚き、怖いと思った。

感染を告げられ最初に浮かんだのは、何故私という怒り、何処で誰から感染したのかという疑問、「感染させていたらごめん」という電話に妻は「謝らないで」と言ってくれたものの、他の人に感染させていたらという申し訳なさであった。流石にその夜の寝つきは悪く、それまで見聞きしていた報道のネガティブさの所為か、思いはどんどん悪い方へ向かってしまう。数日ほど経って、初期に感染して亡くなられた方々には心苦しいが「夏以

降、未だ治療法の確立は無いが、ある程度治療の筋道はできつつあり高齢者の死亡率も下がっている」という信頼できる医師からの情報に、やっと治るかもしれないと思えたのだった。

少し回復してリハビリを再開したが、病室からは一歩も出られないので、入口の嵌めごろし窓から廊下を覗いていた。忙しく働く病棟スタッフを眺めていると自分が水族館の魚になったような多少の閉塞感を感じた。コロナ病棟の医師や看護師が悲壮感も困難さも見せず、淡々と普通に接してくれたことで気分は落ち着いていった。何も知らされない不安を煽られるが、毎日医師からは治療経過を丁寧に説明してもらえ、焦りもなく治療を受け続けられて感謝している。看護師さんはかなりの過重労働に思われたが、「この病棟では皆、暗く元気がないのに、リハビリ頑張っていてえらいですね」と朗らかに励ましてくれ、これも嬉しく有難かった。

ネット礼拝を聴くことが出来、オンラインで顔を見て話せたことは心の支えとなり、大いに力づけられた。「あなたは百人町教会の仲間と思えますか」という五〇周年記念アンケートに今は、より強くそうです！と答えたい。百人町教会という共同体を信頼し、祈り支え合っているのだという確信が闘病の大きな支えになっていた。コロナの収束は未だ見通せない中で、コロナ禍を共に生きるために、治愈した者として何が出来るかを考えている。

慰めの預言

エレミヤ書四十五章一―五節

賈 晶淳

今日選びましたエレミヤ書四十五章は五節しかないエレミヤ書で一番短い章です。この四章を選びましたのは二つの理由がありまして。一つは、「バルク」という人物について知りたく選びました。もう一つは、証詞のタイトルのように慰めの預言であるためです。

先ずバルクという人物について調べたいと思います。エレミヤ書でバルクの名前が最初に登場するのは三二章です。エレミヤがゼデキヤ王を批判する預言をしたことで宮廷の獄舎に拘留されていた時のことですが、その時にエレミヤのいとこであるハナムエルという人が来て、アナトトにある畑を買い取ってほしいと頼みます。このことはルツ記でも出ている嗣業の土地を一番近い親族が代わりに買い取ることです。この時にエレミヤはその要求を神の意志として受け止め、アナトトの畑を買い取ります。しかし、どう見てもこの時のエレミヤは拘留されている身であり、王国もバビロンに怯えていた時期で土地を買い取る状況ではありませんでした。しかし、エレミヤのこの行為を通して神は将来イスラエルを再びこの土地に戻すという希望を伝えようとしたのです。その三二章の一四節と一五節の預言です。

「イスラエルの神、万軍の主はこう言われる。これらの証書すなわち、封印した購入証書と、

その写しを取り、素焼きの器に納めて長く保存せよ。イスラエルの神、万軍の主が、『この国で家、畑、ぶどう園を再び買い取る時が来る』と言われるからだ。」

この土地契約の時にエレミヤの代理人の役を務めたのがバルクです。三二章一二節です。マフセヤの孫であり、ネリヤの子であるバルクにそれを手渡した。いとこのハナムエルと、購入証書に署名した証人たちと、獄舎にいたユダの人々全員がそれを見ていた。

この後バルクの名前が登場するのは三六章の全般です。特に注目したいのは三六章四節以下です。

エレミヤはネリヤの子バルクを呼び寄せた。バルクはエレミヤの口述に従って、主が語られた言葉をすべて巻物に書き記した。エレミヤはバルクに命じた。「わたしは主の神殿に入ること禁じられている。お前は断食の日に行って、わたしが口述したとおりに書き記したこの巻物から主の言葉を読み、神殿に集まった人々に聞かせなさい。また、ユダの町々から上って来るすべての人々にも読み聞かせなさい。この民に向かつて告げられた主の怒りと憤りが大きいことを知って、人々が主に憐れみを乞い、それぞれ悪の道から立ち帰るかもしれない。」そこで、ネリヤの子バルクは、預言者エレミヤが命じたとおりに、巻物に記された主の言葉を主の神殿で読んだ。

ここで分かりますのはバルクが字の読み書きができる人であったということです。因みに

エレミヤが字の読み書きができたのかは分かりません。もしかするとできなかったかも知れません。今から二六〇〇年前のことです。当時バルクが使っていたのがヘブライ文字であるかどうか分かりませんが、文字の読み書きができるのは専門の分野で、その教育を受けた限られた人しかできない時代でした。バルクは多分その分野の人で、三二章ではエレミヤの代わりに土地契約の立会人となり、三六章ではエレミヤの預言を巻物に書き止め、それをエレミヤの代わりに神殿で読み上げる役を務めているのです。当時の宮廷や神殿において文字を扱う専門職の人を書記官と呼びました。この三六章一二節に宮廷の書記官の名前が並べられています。

王宮にある書記官の部屋へ下って行った。そこには、役人たちが皆、席に着いていた。書記官エリシャマ、シエマヤの子デラヤ、アクトルの子エルナタン、シヤファンの子ゲマルヤ、ハナシヤの子ツイドキヤをはじめすべての役人たちがいた。

ヨシヤ王がメギドでのエジプトとの戦いで戦死した後、宮廷内にはエジプトを支持する体制側とバビロンを支持するエレミヤのグループに分かれた対立構造が生じます。三六章にはその一部の様子が描かれています。例えば二三節にはヨヤキム王が自分を批判するエレミヤの預言が書かれた巻物を王宮の暖炉の火で燃やしている場面が書いてあります。

ユデイが三、四欄読み終わることに、王は巻物

をナイフで切り裂いて暖炉の火にくべ、ついに、巻物をすべて燃やしてしまつた。

また宮廷内にはエレミヤを支援し、保護に努める人々もいました。例えば、一九節にはエレミヤとバルクの味方をしている人たちが二人に身を隠すように勧めています。

そこで、役人たちはバルクに言った。「あなたとエレミヤは急いで身を隠しなさい。だれにも居どころを知られてはなりません。」

そのようなところでバルクの働きは大変重要な意味を持つていました。書記官というのは一般的に宮廷や神殿に属して働いている権力側の役人です。即ち、王の記録や契約文書、そして神殿での祭儀用の文章などを扱う人々でした。そのため記録によりますと古代中近東の国家では彼らを養成する学校もあつたようです。彼らによってギルガメッシュ叙事詩のような大作も書き残されています。

ただイスラエルには王の記録だけでなく、律法書や預言書などをまとめる人々が存在していたと思われまゝ。書記官の殆どは権力側の代理人を務めていましたが、聖書の編著者の場合はその多くが預言者と共に在野のグループに属する人であつたと考えられます。エレミヤを支えていたバルクも反体制側の記録官と言え存在在だつたのでしよう。

このことが意味するのは大変重要なことです。数週間前の証詞で預言者エリヤやナタンのお話をしましたが彼らはサムエル記や列王記に王の歴史の一部として記されている人物で

すが、紀元前八世紀以降の預言者はそれぞれ名前を持つ書物があります。例えば、アモス、ホセア、イザヤ、エレミヤ、ミカ、ハバククなどです。彼らを専門用語として記述預言者と言います。同時に審判預言者とも言います。神の裁きの預言を多く残しているためです。彼らは王の足を引つ張るための存在ではなく、王朝時代に神（民）の側で権力批判をし続けた真の指導者であつたと思ひます。そのため常に体制側より少人数で動き、そういった意味でバルクはとても貴重な存在でありました。エレミヤ書の多くの部分はバルクが書き残したものと考えられます。

バビロン捕囚はこのような状況を変えまして、体制側の多くの書記官らも捕囚として連れて行かれますが、同時に王朝は途絶え、彼らの身分も変わります。故郷ユダやエルサレムを思う望郷の民となり、過ぎし日のエレミヤの預言を再考する立場になります。バビロンで聖書の大きな輪郭を構想したと思ひます。そのための資料の収集や保存などを行い、哀歌を書き残しました。それが伝統としてクムランのエッセネ共同体にも伝わり、福音書をまとめるのにも大きな力となつたと思ひます。

本文の四五章は、四三章でエレミヤとバルクがバビロンの報復を恐れて逃れる集団によって強制的にエジプトへ連行されますが、彼らは飢えと剣で一人残らず死ぬという四四章での絶望的な神の託宣の後、エレミヤの口を通してバルクに与えられた希望の預言です。

あなたは、かつてこう言つた。「ああ、災いだ。主は、わたしの苦しみに悲しみを加えられた。わたしは疲れ果てて呻き、安らぎを得ない。」

この三節の言葉が絶望の中でのバルクの苦悩でありましたら、エレミヤはバルク以上の苦悩の持ち主であつたでしよう。四節はバルクへの神の慰めの預言です。

バルクにこう言ひなさい。主はこう言われる。わたしは建てたものを破壊し、植えたものを抜く。全世界をこのようにする。

この言葉は絶望のように見えますが希望の預言です。エルサレム神殿やダビデ王朝が滅びの運命となるのは神の意図によるもの、同じく神は将来バビロンも滅びの運命へ導くことができるという内容です。次は五節です。あなたは自分に何か大きなことを期待しているのか。そのような期待を抱いてはならない。なぜなら、わたしは生けるものすべてに災いをくだそうとしているからだ、と主は言われる。ただ、あなたの命だけは、どこへ行つても守り、あなたに与える。

私たちは新型コロナウイルスの脅威下で既に一年を過ごして来ましたが、もう疲れしました。私たちは今何を期待すれば良いのでしょうか。オリンピックの開催でしようか。国の経済、株価のことでしようか。皆の命、皆の生活、皆の健康だと思ひます。大きな期待感より、命を守つて下さるという神のバルクへの約束は大きな慰めであつたでしよう。同じく私たちにも。(二〇二二年二月一四日証詞より)

奇跡のような時間

赤尾 泰子

一九二一年から九八年を生きて、七月一日朝、母弘子が亡くなった。こんなに長い命を与えられるなんて、父方・母方の中でいちばんの長生をしたことになる。これにあやかれば私にもまだまだたつぷり時間があるはずなのだけれど。

母は八〇歳になる頃、居を姫路から私のところに移した。自立しての生活が寛束なくなつたからである。長い一人暮らしの不安からかその頃の母はかなり精神が不安定であつたのを覚えてる。

今母のことを思つて一番に目に浮かぶのは最後を過ごした介護施設の玄関、ホール、介護者たち。テーブルの前の定座に座っている母の姿や他の入居者の表情、その様子を昨日のことのように思い出す。どの施設も八割がたが女性で男性はとて少ない。みんなそれぞれ若い時があつて、活気に満ちて輝いていた時があつたに違いない。時分時になるとトレイに二、三種の料理が載せられて運ばれてくる。刻み食、ミキサー食、ゼリー食、とろみのついた飲み物、薬包、目薬も見える。ここでは毎日、三度三度この繰り返しで全く動かない空気、ぬるい時間が流れていくのだ。残念なことだけれど今の私には若いときの元気な母の記憶はあまり鮮明ではない。母は大家族に嫁し、末は六歳の義弟に始まって義妹弟七人が自立するまでの親代わりだった。

私は母に抱かれた覚えもなければ甘えたことも一緒に寝た記憶さえない。あまりに家族や出入りの人が多く自分の子どもを構つてやるゆとりもなかったのだと思う。

子ども心にその母には踏み込んでならないう見えない世界があつていつも何かしら距離があつた。今になって思えば、おそらくそれは母が唯一の拠り所としていた信仰から来るものであつたに違いない。折につけ長い祈りをする母をとて遠くに感じたものである。



私の部屋の隅に大きな段ボール箱が一つある。とても重い。中にはこれまで利用したデイサービス、グループホームなどの介護記録や誕生日カードなどがぎっしり入っている。それは母と私の葛藤が綴った記録でもある。だからその段ボール箱を開けて、一つ一つ手

にとつて見ることもないと分かつてはいるが処分することもできないままでいる。

母との時間は時に終わりが無いように長くそれでいてまた短かった。母の晩年を共に歩けたことは本当に感謝である。この過程がなければ自分に与えられているこの奇跡のような時間に気づくことはなかったかもしれない。何も持たずふつと蠟燭の灯が消えるように母は去った。

夫の思い出

坂 百合子

夫は五人兄妹の末子。母を幼くして亡くしたので皆から可愛がられて育つた。美竹教会では年上の女性からやさしく接してもらつた。

お酒が好きで、ある時期は毎晩、西所沢駅で下車すると「今日のおかずは何？」と聞くので「何故？」と問うと「どの酒にするか決めるのが楽しみ」と言われた。特に日本酒が好きだったが、八〇代になってからはブドウ酒。亡くなる数年前からは殆ど飲まなかった。

腰が悪いのに二本杖をついて国会議事堂前に行き、平和を求めて運動していたが、私は夫が帰つて来る迄不安だった。家の近所の散歩も一日一回していたが、それも不安だった。転ぶと起き上がれないから。

肺炎で（二〇一七年八二歳）一か月入院、肺炎は治つたが歩行が思うようにならない。頸椎手術（二〇一八年八四歳）で一か月余り

入院したが帰宅後やはり歩行が思うようにいかない。それ以後入院はしない事を本人と決めた。

七〇歳で退職後、「九条の会・所沢・山口」を立ち上げ、教会での事、議事堂前での色々な人からの情報を伝え、九条の人達と連携し、活動していた。九条の会では「現場運動家」と呼ばれていた。おとし山口地区の文化祭で活動の展示を行い、近所の人達も楽しみに読んでくれ、本人も喜んでいた。



昨年九月に賈先生がお見舞いに二回来て下さった。帰る時先生に祈って頂いたが、最後の日、先生に続いて夫が祈った。びっくりしたが私は祈りは神様との会話だと思っっているので嬉しかった。

最後の一か月、地域の訪問医師、看護師、デイサービスを受けた。配食も利用したが、最後まで自宅で看病する事は出来なかった。

坂敬夫さんを想う

小池 健治

坂敬夫さんは私にとって信仰の大先輩です。

美竹教会以来六十有余年交わりを深くさせて頂きました。一九五八年上京して美竹教会に出席して早々から、聖書研究会で、坂さん、笹淵昭平さん伊藤虎丸さんなどと一緒に聖書を読み、信仰の初歩から学ばせていただきました。当時、坂さんは地下資源開発の会社、笹淵さんは大正海上保険の本社調査課に勤務(労働組合でも活躍)、私は人事院勤務、皆、忙しい仕事が終わって、第一、第三の金曜日、教会二階の畳の部屋に三々五々集まって、聖書の研究をしました。研究といってもその日の聖書の箇所勉強はそこそこに、人生、社会、仕事、そして信仰のことなど様々な話題で話し合いました。若かったから皆元気活発でした。坂さんは北海道へ赴任していったんは離れましたが、戻ってまた参加されました。私は、司法試験の勉強のため参加は時々になりましたが、坂さんらとの交友が今まで通りだったことは言うまでもありません。合格した時は、とても喜んで下さいました。

坂さんは、北海道から帰京後信仰上の決断をされて社会福祉法人愛隣会へ、と福祉の世界へ進まれました。その後は資金集めなどにも苦勞に苦勞を重ねられたようです。弁護士会にも何回かバザーを開きに来られ、買わせて頂いた絵の一つが今も部屋に飾ってあります。一面白樺の高原、向こうに雪山、背景は

青空、この明るい希望に満ちた絵を見ると、いつも坂さんを思い出します。愛隣会をおんぼろの旧兵舎から今の立派な建物に建て替え、素晴らしい利用者の場とされたのも、坂さんのいろいろな苦勞あつてのことです。聖研を愛隣会で開かせていただいたときには、いつも門前の屋台で坂さん笹淵さん岡川さんなどみんなが一杯やりながら談笑したことも懐かしい思い出です。

一九七〇年美竹教会を出て、百人町の福風会の一室で初めからスタートして苦勞をしたのも一緒でした。百人町に移ってからも信仰上も実際の教会のことも、何かと頼りにさせて頂きました。教会関係の重要なことで、西早稲田まで二人で何度も行って、ある有力牧師に、一緒に掛けあつたこともありました。何をすることも坂さんと一緒ですと安心してことを運ぶことができました。

坂さんが平和運動に熱心だったことはよく知られています。私自身が関係している政教分離の会やヤスクニ反対の集会にも必ず出席して声援を送って下さり、少人数の集会だけにとっても有難かったです。

近年は脊椎の痛みなどで教会へも出にくいようでしたが、会うたびに声掛けしたり、されたり、思い出は尽きません。内臓のガンで旅立たれましたが、立派に現世を生ききり、天へ向かわれました。そのことは、私にとって、坂さんからの最後の教えのような気がします。坂さん天上でまた会いましょう。

二〇二〇年一月の集会報告

高瀬 礼子

百人町教会にとって重要な集会である「教会創立五〇周年記念会」と「永眠者記念会」が開催されて当然であると誰もが疑わなかった。その準備のために数年前からアンケートも行われその後のまとめもなされ、その上五〇周年記念小冊子も出来上がっていた。このようなコロナ禍の状態では集まるということとは、とうてい無理であると誰もが納得させられた一〇月初めである。その日は聖書研究会が予定されていた。私は朝いつものように目覚め、さつき見た夢を必死で思い起こしていた。場所はASOハウス、私は戸の外にいる。内ではワイワイガヤガヤと楽しそうな大勢の音が聞こえる。いつもの光景であることが想像できる。その中に入ろうと戸を必死で開けようとすが開かない。ありったけの力で頑張つてやっと開いた中には百人町教会の皆さんがいつものようにいた、その中に入つていくてうれしかった自分がいた。そして夜ZOOMで聖書研究会に参加した。全てが終了した後、賈先生に「何とかならないんでしょうか？」無理を承知で詰め寄っている自分があった。日付が変わりそうな時間になり、私は多摩地域の方を、先生は都心の方をネットで検索することを約束してZOOMを退室しその日は終わった。

翌日こちらの情報を報告しあとは賈先生にお任せした。集会の時間や予算をアレンジし

てくださり世話人会にも図りほとんど拍子でプログラムが決まった。私の意識にはなかった二〇一九年度教会総会も盛り込まれ一月一日の集会は三部作で構成された。おまけに懐石弁当も備えられた。

日時・二〇二〇年一月一日一三時から
場所・戸山サンライズ大会議室（新宿区）
全体進行・佐藤かよ子さんの食前の祈祷（昼食会）で始まり

永眠者記念会 司会・榎本征子

五〇周年記念会 司会・小島悦子

二〇二〇年度教会総会 議長・賈晶淳

閉会祈祷・高瀬礼子で無事定刻前に全ての会を終えることができた。



会場が広すぎて音がよく聞こえないとかお弁当が多すぎて食べ切れない、換気が良すぎて寒すぎると細かいことを言えばまだまだあると思うが、満足に行かない形にしるるにかく集まられたことに感謝したいと思う。

五一年目の新しい歩みにZOOMによる「ろばを読む会」が始まったことを見てもまだまだ百人町教会の進化は続く気がする。

宗教者核燃裁判 第一回口頭弁論

泉谷 五十鈴

「宗教者が核燃サイクル事業の廃止を求める裁判」の第一回口頭弁論が昨年十二月十七日、東京地裁で開かれた。コロナ禍による延期で当日の傍聴も危ぶまれたが、結果は二倍以上の抽選となり、原告代表二名の陳述と弁護人代表の訴状要旨説明がなされた。

真言宗御室派明通寺・中寫哲演住職は、関西圏の電力確保のために一五基もの原発が設置されその廃棄物を六ヶ所村に押し付けてきた若狭の地の一仏教者としての苦悩と、仏教理念に相通する日本国憲法に則り英明な審理を願うと陳述された。六ヶ所村で長年反核燃を祈り行動してきた日本キリスト教団八戸北伝道所・岩田雅一牧師は、核燃サイクルは「命を破壊する死のサイクル」であり「命を選べ」という神の言葉と憲法の平和主義と基本的人権に根差してこの訴訟をたたかっていたいと弁論された。河合弘之代表弁護人からは日本の宗教者が立ち上がった意義が語られた。当日オンラインでは、大飯原発運転差止訴訟で原告勝訴判決を出した樋口英明元裁判長の講演と、原告一三人によるリレートークも行われた。インターネット「宗教者が核燃料サイクル事業廃止を求める裁判」で検索し「ブログ」をクリック。ブログをスクロールすると樋口講演や記者会見の動画が見られる。ブログの中で「原告団NEWS No.3」も開いてお読みください。

「ろばを読む会」について

石田 美智代

百人町教会五〇周年記念会（二〇二〇年一月一日）を終えた後という節目のタイミングで、「ろばを読む会」が始まりました。ZOOMを使った形態なので、遠方に住んでいる方も参加できるメリットがあります。何かと制約が多いコロナ禍だからこそという賈先生の発案で生まれた新企画です。

「ろばを読む会」は、毎月第一火曜日午後三時から、自由参加で行われています。これまでの四回の内容は以下の通りです。

第一回 一月三日 「ろば」二二六号

参加者一二名 司会・石田美智代

賈先生の証詞「聖書の旅」、読書紹介「知の旅は終わらない」（立花隆）など

第二回 二月二日 「ろば」一三三号

参加者一二名 司会・榎本征子

木田先生「あがないの運動」、座談会「阿蘇牧師を迎えて」など

第三回 一月五日 「ろば」二二七号

参加者一三名 司会・権田一正

空閑厚樹さん「学ぶこと、変わることに、集うこと」、高島紗綾さん「コロナ雑感」など

第四回 二月二日 「ろば」一九二号

参加者一四名 司会・小島悦子

佐藤研さん「大惨事を前に神信仰は可能か」、報告「ソウル訪問」「CSクリスマス会」など
毎回の終わりに、次回読む「ろば」と司会

者を決めます。「ろば」最新号が出るタイミングではそれを、それ以外では過去のものから選びます。新しい号の場合は、礼拝の中で直接聞いた話を改めて活字で読み直すと印象が異なることもあり、参加者に書き手がいれば、話す時と書く時の違いを聞くこともできます。

ある程度時間が経った「ろば」の場合は、発行当時の社会状況を解説してもらいながら読み直します。一人で読んだときには、思い至らなかった時代背景や書き手の立場などを知ると、「そういうことだったのか」と発見することが多く、そして当時の問題が今も形を変えて残っていることに気がつきます。これは聖書を読むことも繋がり、賈先生の証詞を聞きながら、当時の人々の暮らしに思いをはせることよって初めて預言者やイエスのことばや行動が理解できると同じだと思いい、感慨深いものがあります。

コロナ禍により高田馬場での礼拝ができなくなっても、ネットを通じて礼拝を続けることができ、応答もPDFで共有することができていたので、本当にありがたいことです。ただ、現状の応答は、いったん頭の中で整理して書き送り、翌週にほかの方々の応答を時間かけてゆっくり読むスタイルです。このスタイルが合っている方もいらつしやると思いますが、私の場合は、文章にするとき、言葉になりきらなくて削らざるを得ない部分が多く、また「これは的外れではないか」と応答を見送ることも何度かありました。リアルタ

イムの応答であれば、まとまりきらない感情レベルの疑問であっても、発言しながら思考をまとめることができたし、その場で反応を確認できると思えば、的外れであってもとりあえず投げかけることができているのに、それができない。ちよつとしたフラストレーションを感じていたときに「ろばを読む会」が始まったので、毎回楽しく参加しています。コロナが収束しても「ろばを読む会」はZOOM形式で継続する予定です。

インターネットの恩恵がありがたいからこそ思うのは、高田馬場での礼拝に遠方で参加しにくいという方がネットを使って礼拝やその他の活動に参加しやすくなったというポジティブな面とともに、通信環境が整わず、繋がりたいけれど繋がれない方もいるというネガティブな面の両方を考えなければならぬということ。また、ZOOMでリアルタイムに交流ができるとはいえ、対面の時にはあった、隣り合わせた方から聞く近況や、駅との往復でばつたり会った時に聞く話などは、ごっそり抜け落ちます。高田馬場の思い出を数えて見ると、証詞や応答以外に、意外と「隙間の時間」の事柄が多いものです。

コロナ禍が収束して高田馬場の礼拝が再開すれば、「隙間の時間」や、通信環境が整わない方が参加できないという問題は解決し、さらにコロナの置き土産ZOOMという選択肢がひとつ増えるのですから、少し前向きな気分になります。

図書紹介

『ルース・ベイダー・ギンズバーグ』

―信念は社会を変えた―

あすなる書房

この本は、ネルソン・マンデラ財団が、現代の影響力をもつリーダーたちが真に重要と考えていることを記録し、共有するために編まれたシリーズの内の一冊です。マンデラは緊張状態の時には過激な勢力が力を伸ばし、感情に任せると合理的に考えられなくなるから、真のリーダーは緊張を和らげることに注力せよといっています。

現在、全世界はコロナにより緊張状態にあると思います。ワクチンの効果も不明であり、誰もがコロナ感染の可能性があるとはいえ、感染の確率は人々の所属する階層等により等しくは無く、コロナ後は格差や分断が更に進んでいくのではと危惧します。このような状況でこの本を読むとルースの数々の言葉に力づけられます。「将来に希望を持っている。希望の兆しは至るところにある」というのです。

彼女は一九三三年生まれ、「社会のあらゆる階層で男性と女性が真の意味でパートナーとなり、今より暮らしやすい世界が実現する」という夢をかなえるために「女性蔑視の時代に大変な努力を続け、当時では珍しい、妻の仕事を自分の仕事と同じくらい重要だと見なし、てくれたマーティンと結婚し、彼の支援と応援も受け、弁護士として一貫して女性やマイノリティの権利発展に努め、一九九三年にク

リントン大統領により史上二人目の女性最高裁判事に指名されました。判事になってからも憲法の下での平等の実現に向け力を発揮しました。

彼女は母親から二つ、自立することとレディになることを望まれます。一読すると誤解するかもしれませんが、母親の言うレディとは役に立たない感情に流されたり、怒りに任せて言い返したりせず何度か深呼吸してから理解していない人を教え導く女性なのです。ドキュメンタリーや映画を観るとその通りの彼女の穏やかな話しぶりと笑い声を聞くことが出来ます。これがマンデラの言う緊張を和らげ穏やかに説得する力なのでしょう。

類い稀な女性の行動をただ感嘆して読み終えるだけではなく、そして判決は時代の波に左右される現実がある以上、今を生きる私たちは未来を生きる次世代のために、共に生きようというイエスの言葉を守るために、出来ることには果敢に挑戦し、間違っていることには抗い続けねばなりません。そうすることが希望の道であり、読み終えたものの務めであると思いました。

ステイホームで女性と差別の映画を観ました。共感はできませんがダメ夫に見果てぬ夢を成し遂げさせる「バイス」。六〇年代NASAを舞台にした「ドリム」。たった三〇年前の実話かと驚いた「スタンドアップ」等、差別を無くす難しさに負けてはならないと思いました。

(小川 ひとみ)

ろばのせなか

百人町教会がオンライン礼拝に切り替えたのは二〇二〇年三月二十九日からでした。その状態は今も続き、その間に三人の大切な教会員の方々が天に召されました。一方で、思わぬことからコロナ感染した小川和男さんが完治されたのは私たちにとって大きな喜びです。

礼拝の形は徐々に整い前奏、讃美歌二曲、証詞を聞き応答を書くことも定着しました。証詞を聞き応答を書くことも定着しました。買牧師は毎回違う聖書箇所を選んで一度も休むことなく心に沁みる証詞を続けて下さいました。今後は月一回、ZOOM形式での礼拝を行なう予定です。恵まれた環境で礼拝ができることには本当に感謝しています。それでもなお「共に集うこと」の大切さを思い、その時を待ち望む気持は「記念会」や「ろばを読む会」の報告からも伝わってきます。

東日本大震災から一〇年を迎える直前の二月、大きな余震が襲いました。忘れてはいけない！と警告を発しているようです。原発事故がなければ復興はもう少し早く進んでいたかもしれません。国の責任はいまいなままあと何年何十年待てば故郷に帰れるのかと待ち続ける人々を思います。根本的な原子力行政の在り方に疑問を突き付ける宗教者核燃裁判の行方を見守りたいです。

蚕室禧年教会員の趙容来さんが、韓日議員連盟の事務総長に選ばれて両国の関係修復のために力を尽くしておられます。応援したいですね。

(榎本 征子)